



Title	10年間の締めくくり
Author(s)	柏木, 哲夫
Citation	臨床死生学年報. 2002, 7, p. 1
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/8975">https://hdl.handle.net/11094/8975</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 10年間の締めくくり

柏木 哲夫

2002年5月29日、63歳になる。来年の3月で定年である。アッという間の10年間であった。53歳の時大学の教官にならないかとの話があった。臨床医としての道を考えていたので、53歳でキャリアを変えるのは人生の誤算（53）ではないかと思った。友人の一人がこれは誤算ではなく、ゴーサイン（53）だと思うと言ってくれた。これがいたく気に入って決断した（もちろんこれだけで決めたわけではないが）。

10年間の教官生活は誤算ではなかった。人間科学部にお世話になって本当によかったです。何よりも視野が広がった。医学という狭い専門分野から人間科学という、とても広い領域で多くの研究者と接することが出来たのは幸運であった。それに講座の中で、いいスタッフと優秀な学生に恵まれた（ごく少数の例外はあったが）。

62歳の一年間、いろんなことが起こった。「巻頭言」を書くのもこれが最後なので、お許しいただいて、少し私的なことも書かせていただく。先ず孫が二人誕生して、私も「オジイチャン」になった。まだ実感は湧かないが…。それに学位を二つ（医学博士と人間科学博士）いただいた。留学その他で医学博士の学位をとる機会を逃し、もういいかとも思ったが、定年1年前の区切りにと挑戦した。学位論文を提出する前に英語の試験を受ける必要がある。教務に行って「学位のための英語の件ですが…」と言うと、「御苦労様です、今年は先生が出題ですか」と言われ、気恥ずかしい思いをした。

本も二冊出版した。「ターミナルケアとホスピス」（大阪大学出版会）と「癒しのユーモア」（三輪書店）である。後者はここ数年取り組んでいる（？）川柳を土台にした私流のユーモア論である。意外に評判がよく、初版は数か月で売り切れた。この一年を川柳でまとめると「六十二学位二つに孫二人」ということになろうか。

大学での生活も後一年をきった。とても居心地が良いので、許されればもう少し居座りたい心境だが、定年延長論には間に合わないので仕方がない。幸い、昨年10月に恒藤暁助教授が赴任して下さったので、後は安心して任せられるので、これもとても有り難いことである。講座も院生15名、学部生16名で、部屋のやり繕りがかなり窮屈になっている。研究意欲は盛んで、協同研究も進みつつある。4月には初めての試みで、学外で1泊のFAT（Fellowship and Academic Talk）という院生だけの集まりをもち、とても有意義であった。

2003年3月5日～8日に大阪国際会議場で「第5回アジア太平洋ホスピス大会」が開かれる。私が会長、恒藤先生が実行委員長で講座の皆さんにも協力していただいて準備を進めている。国内から1,000名、海外から300名の参加を予定している。その他、「退官記念論文集」の発行や最終講義の準備など、10年間の締めくくりに忙しくなりそうである。健康が守られて、まわりの皆様にご迷惑をかけることなく締めくくりたいものと願っている。

2002年5月  
教授室にて